

## 今井源衛著 『在原業平』

吉田, 達

<https://doi.org/10.15017/11998>

---

出版情報 : 語文研究. 60, pp.58-61, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

△ 紹介 △

今井源衛著『在原業平』

吉 田 達

業平について部分的に書かれたものは多いが、正面切って『在原業平』と題した単行本は意外に稀である。吉川弘文館の「人物叢書」にも見えないし、僅かに、井上豊氏（『在原業平・小野小町』昭18）・金田元彦氏（『業平傳記』昭37）・日崎徳衛氏（『在原業平・小野小町』昭45）などがあるにすぎない。思うに、その理由はこの人物に関する直接資料が乏しいからばかりではなく、既にその生存の時代より史実と文学的領域との複雑な交錯のうちにこの人物像は存在し、ために多様な変容をほしひまにしてきたことに依ると思われる。従って、その実像の追跡には、「文学」と「歴史」との両分野に渉る豊富な学識と、更には多彩な文学的感情による読解力や人間洞察の鋭い眼光が要求されるわけである。ここに最適の筆者を得て、この困難な「伝」が世に贈られた喜びは、まことに大きい。

最初に、「目次」を鳥瞰して、その全貌を窺うための便宜としよう。

第一章 家系と生い立ち

はじめに

平城天皇と葉子の爰

父、阿保親王

母かたの人びと  
母と兄弟たち

第二章 青年時代

元服と仕官  
小野篁と伴善男  
初期の歌  
暗い谷間

第三章 彷徨の十年

伊都内親王の死  
放縦不拘の人  
二条后高子との恋

第四章 官人業平とその周辺

応天門の爰  
右馬頭任官  
渤海国使の来朝

第五章 晩年と子供たち

藤原常行・良近の死と貞数親王の誕生  
右近中将・蔵人頭に栄転する

生い立ち  
承和の爰

良房太政大臣となる  
立太子争いの伝承  
行平の因幡守赴任  
春の別れ

伊勢斎宮恬子との密事  
東下り

藤原良近と『伊勢物語』百一段  
性喬親王と業平  
業平と行平

大江音人・紀有常の死  
その死

子供たち

## 第六章 その和歌

『古今和歌集』序と六歌仙時代

業平の歌風

貫之への影響

## 第七章 業平・伝承の展開とみやび

伝承の起こり

『伊勢物語』

みやび

『伊勢物語』と『大和物語』

滋春伝説

『土佐日記』

王朝文人の業平観

先ず「はじめに」は、随想風のやわらかな筆致で、この歌人に対する筆者自身の幼少時の印象が鮮明に語られていて、楽しく読ませる。一転して、第一章からはひじょうに密度の高い記述がひろがり、その間に史書の引用や位階官職名を伴った人名・年紀などがふんだんに駆使されて、一般教養書としては驚くほどの精度の展開である。ところが不思議なことに、いつもゆったりとした自然のリズムを作って流れる行文は、めったに人を疲れさせない。漢語・和語の硬軟を適切にとり混ぜた文体は起伏抑揚に富んで、歴史的記述の平板無味に陥らず、更に、史実の条理を押えてその奥を探り、読者の心を誘って興に入らせる力があるからである。入門者に対する配慮の程も、「よみがな」の懇切さや専門用語の略注に窺えて、筆者のこまやかな心配りが快い。以上は、全巻を通して言えることである。

さて、第一章「家系と生い立ち」は、特に父阿保親王の不遇な配流とその人間像形成の過程や、継繩の人物像とその周辺の分析、乙叡と平城帝との間の性格点描など、薨卒伝を博搜して随所にうがった解釈や推理が見える。就中、母伊都内親王の『願文』に押された

手形にはじまって、その人柄や兄弟などその周辺を洗い尽くした後、再び父に戻りながら、業平幼少年期の生活に迫ってゆく辺りの行き届いた人間的な考察には、目をみはらせるものがある。

第二章「青年時代」は、いきなり『伊勢物語』の「初段」によって開幕する。然し、ここに本書中で最も厄介なテーマが、顔を出して来る。それは、文学的虚像と業平史実との交渉の主題である。筆者は、これから全巻に亘って、虚・実の間に身をかわしながら終始泳ぎ続けることになるのだが、これが本書の見どころの一つなのである。ともあれ、この章でも、文章は、活力に充ちて時代史的背景を叙し、和歌興隆の兆しを押さえながら、六歌仙時代の出現に向かって生彩を増す。ここで、はじめて『伊勢物語』の一章段が本文のまま登場する。三十九段である。古来難解な段であるが、氏は、当世風の「色好み」源の至と業平との一見「恋のさや当て」にも似たこの一場面を見事に処理された。

第三章「彷徨の十年」は史実に欠落する部分で、文学への依存度は急激に増加する。従って、『伊勢物語』5・4・3・6・69・9・10・11・12・13・14・15・7・8・59段がこの順序で現われて、実に十五章段がこの第三章に集中する。「要するに、『伊勢物語』本文は後注とあわせて、あるときには業平の実像を語り、またあるときにはまったくの虚像を語る。そのあたりの腑分けがむずかしい。しかし、またそれだからこそおもしろいともいえるのだ。」(92頁)と氏は述べておられるが、その「おもしろいともいえる」ところを、史実の側からギリギリのところまで追いつめながら読者の前に見せてくれるのは、氏の、歴史と文学との両面にまたがった学問的実力の大きさによるものであろう。例えば、69段「齋宮との密事」を追

究して、「それ以上は文学の問題で次元が違うというほかはない」

(III頁)と「ころまで考えつめる学問的誠実さや、「神の斎垣のなかの、ひめやかな艶聞の可能性は、こうしてだれしもが想像しがちなものなのであった。ただ、それが必然性として飛躍するには、別の条件が確かめられなければならないが、業平と恬子の場合には、以上みてきたように、それはない。あるいは、すくなくとも足らない。」(II頁)と、その辺りのあいまいさの闇を斬って明確に断ぜられる見識には、胸のすく思いがする。そのように鮮かな論調の進退を見せられることは、この本の全巻を通じて屢々であった。従って、この本は研究者にとっても、氏の考察の「段取り」を詳細に見せられるので、大いに勉強になるであろう。また、一般の読者にとっても、集中してこの本の世界に入り込んでしまえば、スリリングな知的冒険のおもしろい読物となるばかりでなく、九・十世紀の頃の、この国固有の文芸的文化や美意識がしだいに目覚めて行く辺りの時代史的な実情がつぶさに読み取れて、まことに有益であろう。

さて、第四章「官人業平とその周辺」は「応天門の変」に始まり、惟喬親王や行平との関係に終る。「熟語」では、76・101・79・82・83・114・81段の七章段が、この順序で含まれている。渤海国使来朝の史実を実に綿密に追跡されるのは、渤海客接待使としての業平を点描するためであったが、それはまた、「略才学無シ」と評された業平観の一点を探索する布石でもあった。そして、藤原良近との関係に及び「伊勢物語」百一段の問題に流れこんで行く。実に展開が自然であり、読者は藤原摂関家を前にしての業平、そして惟喬親王の問題へと誘われて行く。氏が最も愛される一首「桜花ちりかひくもれ」の歌もちゃんとそこには配されて来るといふ工合で、遂には坂

口安吾氏までが顔を出すのは、氏がこの本をどれ程に楽しみながら執筆されているかが窺えて、開巻「はじめに」でも、「本書では、ゆっくり語ってみたい」と言われていたことが思い出される。ともあれ、この章では、惟喬親王や行平の人間像の掘り下げは殊に見事で、特に、業平と行平との相違ならぬ、共通点についての考察には大いに教えられた。また、前後するが、惟喬親王が母静子の追善法要に捧げた『願文』の条で、その哀切極まる漢文体の味読を通して、親王の心中を深く察せられる時の筆致に感銘を受けた。それは、平安初期漢文伝の世界に通曉された氏の面目の一端を窺知させる点でもあるが、このような例は枚挙にいとまがない程である。

第五章「晩年と子供たち」では数々の死と誕生の記述が現われて人生の舞台はしだいに大きく移り変わるが、氏の、心情を含んだこまやかな推理や緩急自在な筆致の起伏はいささかも衰えない。特に「その死」の項では、業平自身の有名な辞世歌を『古今集』本文で解説の後、『伊勢物語』二二五段から逆に二二四段に及んで、「物語作者が、こうして業平を本質的には孤独な魂の人間としてとらえていること」に共鳴され、「以上、私はできるかぎり業平の実像追求を目的として、稿を進めてきたつもりであるが、しかし、前にもいったように」として、例の虚像・実像の問題に立ち戻り、『伊勢物語』作者の描いた孤独な業平像は、そのあいまいな領域の典型ではあるが、しかし、実像尊重の理由のもとに、削除するに忍びない点がある。すくなくとも当代に生きた物語作者の業平観のなかの信用すべきもののひとつとして、私もそんなふうには業平をみたいという誘惑にかられるのである。」と、氏自身の一掃着点を文学造型の透視の中で示された後、直ちに飄って「しかし、彼の人生は、これまでみて

きたように、その第一歩から、落ちこぼれあるいは無用者にも似た道を歩んだのであった。晩年数年間、彼には安らぎの時期があったようだが、青春のころに心にしみついた無用者の意識はそのまま、孤独な精神の核になりつづけたところもありそうである。」と、史実との関連を指向しながら結ばれた。氏は最後まで、虚・実両極の微妙な平衡を保持しながら、あくまで時代と人間との底部にあるものを見詰め続けて譲られない。そのしたたかな条理追尋の姿勢に見られる息の長さは、やはり、氏の本文読誦より発する強靱さがそれを支えていたのであると、今更のように理解された。それは氏自身の研究者としての熾烈な知的闘争であり、またそれ自身が至福な愉悅であったとも言える。熱心な読者は、この本の中で、その闘いと愉しみとを著者と共有されることであろう。この章には、『勢語』79・99・16・125・124・49の諸段が引用されていて、一応、業平像とその周辺の描出は完結するが、この本には更に、第六章「その和歌」・第七章「業平伝承の展開とみやび」が続いて、全巻の幕を引くこととなる。特に、第六章は業平の歌風を説いて興味深いが、紙幅の都合で割愛したい。

尚、本書中に引用された書名は和漢古今に互って約20を数え、引用人名はざっと40名に及んで、業平関係記事のコンパクトな集大成の観を呈している。従って、この紹介文が、その全容をよく覆い得なかつたであろうことを、今は恐れるばかりである。

最後に二・三付言すれば、書中に多数散見する誤植はまことに惜しい。氏が急遽入院されたため、初校のみ一回限りの校正は病床でされた由を伺った。多くの教え子たちに敢て応援を依頼されなかつたところに、氏の、徒らに人手をわずらわせようとされない物堅さ

が思われて寧ろ感動させられたが、何しろ、このご著作は今後も水く、業平研究の一指標となることは必至と思われるにつけても、一時も早い改訂が希望されてやまない。ついでに言えば、82ページに「天皇の元服がおそかったから」とあるのは、誤解を招くおそれがある。清和・陽成両帝の元服年はいずれも十五歳であるが、陽成(帝元服時の前年にあたる元慶五年十一月十一日条(三代実録)には伊勢大神宮への「告文」中に「今年天皇御年十四歳成陽成公卿等議奏。加冠之事世間所望。自古行来礼有其時。宜来春正月吉日良辰奉加元服。人望叶曉奏。」とあるように、当時としては決して天皇の元服は遅延してはいない。それが十一歳元服と急に低年次化するの是一条天皇以後であって、それは『源氏物語』時代のレベルである。ともあれ、然るべく訂正いただければ幸いである。

思えば、氏が「業平」を執筆されたそも／＼の始めは、今から三十年近くも前であった。それは、昭和32年7月号『日本文学』に「業平——その1、三代実録の記述に就いて——」同年11月号『同誌』に「業平——その2——」として夫々発表されたが、後に、昭和45年『王朝文学の研究』に収録された。その著の巻末で氏は、「前半の三代実録の記述の分析と後半の伊勢物語の記述の間がうまく繋がっていないし、方法も文体も違うのが、気にかかっている。」と述べておられた。思うに、このご著作には、その長年に亙る懸案を一举に解決されようとお気持も籠められていたかと拝察されて、ます／＼喜びは大きいのである。

(昭和60年5月発行 集英社刊 王朝の歌人 3) 一、四〇〇円)